ネウサラ おはなし

語りながら 聞きながら

仁コロ 又コロ

シヌタプカ村のむすめ

＝旭川市の話

（「日本の昔話2　アイヌの昔話」より）

私は兄に育てられて2人で暮らしていました。兄の言いつけで縫物を覚え、はじめは兄に笑われましたが、今ではすっかり針仕事が上手になりました。ある時、イシカラ村のおばから使いが来て、イシカラ村に招待されました。そこで、一番よくできた着物を着て出かけることにしました。兄はそんな私をみて「ろくでもないものに呼ばれてるんじゃないのか」と言いました。兄の言葉が気にさわって、いちど家に取って返し、ふくれていると、兄は「ひとりごとを言っただけだ。行っておいで」と言って私を送り出しました。いくつも山をこえて、美しい景色に見とれながらイシカラ村に着きました。一番大きな家の前に着くと、おばが私を見つけて、喜んで家の中へ入れてくれました。

左座に座るように言われ、見ると左座にも上座にも、美しい絹のカーテンがかかっていました。おばが食事のしたくを始めたとき、私は何かのかげが見えたような気がしてまわりを見ると、いつのまにか美しい若者が座っています。するとおばも気がついて「なにしにきた！」とどなりながら、なべの中身を若者にむけてまきちらしました。あっと思うと、若者の姿は消えてしまいました。

おばの家に行くと見知らぬ美しい若者が。おばはなぜかおこった

おばはふきげんそうにしながらまた料理をして、それから上等な着物に着がえました。立派なしき物をしいて絹のカーテンの前に座席を作りました。すると、カーテンのおくの部屋から、ひょろっとして行儀の悪い若者が出てきて、ドスンと座席にすわりました。おばは私たちに食事を出してくれました。男の人から食べ物を分けてもらうと、結婚の申しこみを受けることになります。それは気が進まなかったので、自分の分を大急ぎで食べておなかいっぱいのふりをしました。若者は私に食べ物をすすめたそうにしていましたが、私が「もう食べられません」と言いはっていると、やがて部屋に引っこんでしまいました。

おばは「もうおそいからねよう」といって、私がにげないように見張っていましたが、おばがすっかりねむりこんだところでにげだしました。とうげのところまできたところで、だれかに後ろからだきしめられました。私はびっくりして、力いっぱいふりほどいてにげました。家につくと兄は「ばかに早く帰ったな」とおどろきました。

しばらくすると、またおばから使いがきました。私は、何者が私にだきついたのか、たしかめてやろうと思ったのでもう一度出かけていくことにしました。

どうやら結婚を申しこむためにさそわれたよう。必死で気づかぬふり

イシカラ村に着くと、おばは前と同じように大喜びしました。家に入ると、やはり見知らぬ美しい若者がいつのまにか座っていて、おばがおこり出すときりのように消えてしまいました。それからやはりその家の息子に食事をすすめられましたが、何とかそれをかわし、夜に家を出ました。とうげのところまできたとき、やっぱりまだだれかにだきしめられました。私がにげようとすると男の声で「私はトウニポク村の者だ。あなたとは父方のいとこに当たり、いいなずけの間柄だ。あなたに会いに行くより先に、あなたがイシカラ村に呼ばれたので様子を見に来たのだ」と言いました。

家にもどって、兄にいいなずけの事を聞くと、あの美しい若者の言ったことは本当だったのでした。兄は家のとなりに小さな家を造り、お酒を造ってトウニポク村の親子を招待しました。私はいいなずけの若者にすすめられてお酒を飲み、よってしまったので新居のベッドに行って休みました。すると、そこにイシカラ村の息子がしのびよって来ていて、私におおいかぶさってきました。おそろしくて大きな声で助けを呼ぶと、兄といいなずけがかけつけ、イシカラ村の息子を成敗してくれました。それからは、トウニポク村の息子と幸せに暮らしました。

家にしのびこんできたイシカラ村の息子は、いいなずけに成敗された

兄といいなずけに守られる

この話は先月と同じくメノコユカラといって、主人公は女性です。主人公の女性にはいいなずけ（トウニポク村の人）がいることを知りながらイシカラ村の息子が自分の食事の半分をすすめきて、強引に結婚をせまったのでした。気の弱い人だったら、受け取ってしまったかもしれません。

心配したトウニポク村の若者は、様子を見に来てわざと主人公に自分の姿を見せました。おばは、後ろ暗いところがあったのでおこって追い返したのです。主人公はせっかくピンチをきりぬけたのに、なぜもう一度イシカラ村に行ったのでしょう。相手がだれであれ、いきなりだきつくのはワイルドすぎでマナー違反です。一言いってやりたかったのでしょうか。兄がのとなりに建てた小さな家は、結婚する年頃の女性が過ごすための場所です。訪ねてきた男性とここで話し、相手の人がらをみるのです。

ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文 北原モコットゥナシ　絵 小笠原小夜

テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

日下潤一さん（36）

＝自動車販売

アイヌとしての自分 大切に

――ご出身は。

苫小牧市です。札幌大学を卒業して、今は恵庭市に住んでいます。

――札幌大学というとアイヌ文化を学べる所ですね。

初めは知らなかったんです。本田優子先生のアイヌ文化論という授業を受けた時、「アイヌの考え方ではどんなものにもカムイが宿っている」という言葉を聞いて、「どこかで聞いたことがある」と思ったんですね。よく考えたら、祖母や母がいつもぼくに言い聞かせていた言葉でした。もしかしてと思って母に聞いてみたら、うちはアイヌの家系だったんです。

――あ、知らなかったんですか。

はい、それまではどこか遠い存在にしか感じていなくて。「うちがそうだったんだ」と、とてもおどろきました。あの授業に出なかったら知らないままでした。どうして気づかなかったかというと、祖母や母の時代には差別を感じることが多く、家庭内でふれないようにしていたそうです。それでも、カムイの話とかをぼくにしてたんですね。祖母の祖母は口の周りに入れずみをしていたし、家にはアイヌのアクセサリーがたくさんあったそうです。

――それから興味が？

はい、卒業制作は二風谷の貝沢徹さんに指導していただいて、イタ（おぼん）をほりました。結婚する人にプレゼントしたかったんです。むすめが学校でアイヌ文化の勉強をした後、そのイタをみて「なんでうちにあるの」と聞いてきたのをきっかけに話しました。

2010年には二風谷で妻とアイヌ式の結婚式をしました。祖母がアイヌの衣装を着てほこらしげに参加してくれました。それがとてもうれしかったですね。

――読者に伝えたいことは。

私はアイヌ文化を伝える活動はしていませんが、自分がアイヌだということを大切に感じて子どもにも話しています。そういう風に考えているアイヌもいることを伝えたいですね。

タンペ エエラム アン？

「きみ、これ知ってる？」の意味

■トゥンプ

アイヌ式の家は、部屋の仕切りがなく一間になっている家がほとんどでした。部屋を仕切る場合には、ござをカーテンのように下げて部屋をつくりました。その仕切られた所がトゥンプと呼ばれます。

ユカラなどの物語には、部屋がいくつもある宮殿のような家が出てきます。その部屋の一つ一つは特別で、美しい布などでかざられ、金のベッドなど美しい家具があります。そこでは、家の大切なむすめや息子が外のよくないものにふれないよう大事に育てられていたり、年ごろのむすめがお見合いをしたりします。

私たちウレシパクラブに所属する大学生の研究室もトゥンプと呼んでいます。たがいに育てあい、成長していく場所の意味をもち日々学習しています。

（泉洋輔・札幌大学ウレシパクラブ3年生）